
龍は微睡む～蓬萊戯談(ホウライギダン)

香月遥乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍は微睡むホウライギタン
蓬萊戯談

【Nコード】

N0286X

【作者名】

香月遙乃

【あらすじ】

極東の国、蓬萊国ホウライ。清王朝が華王朝に変わってから、優に九十五年以上経ったその国では、科学文明が発達していた。しかし、「神仙の住まう国」とされた伝説は、人々に秘密にされながら、現在も生きていた。ひよんな事から、龍を育てる事になってしまった天下無双の女子高生・倉橋慧くらはしけいとその仲間たちの日常を描いた小説です。史実が関係する事はありませんが、100%ファンタジーです。悪しからず。他のサイトで投稿したものを、こちらでも載せさせていただきます。

ふたりの異邦人…？（前書き）

倉橋慧、龍の雛に会う。崇敬されるはずのその龍の仔どもは、しかし、大変な臆病者だった！全てが始まる、出会いの話。

ふたりの異邦人…？

『史記』秦始皇本紀

「齊人徐市等上書言、海中有三神山、名曰蓬？・方丈・瀛洲。僊人居之。」

（齊の国の人、徐市が始皇帝に申し上げました。「海の真ん中に三つの神山があります。名前を蓬萊、方丈、瀛洲と言い、仙人がいる場所です」と）

袖富ゆふ高校に、季節外れの、そして、全く前例のない転校生が来たのは、秋も深まった十一月の事だった。

この時季は、そろそろ期末考査の影も忍び寄ってくるかと言っ頃だし、そんな時季に転校してきても、考査が終われば冬休みだ。

転校してくるには、不自然。

それに何より、この袖富高校は、転校生を受け入れていないのだ。しかし、そんな事には一人を除いて誰も気付いてはいないようだった。

「ちよつとねえ、慧！ 聞ってる？ 転校生男の子だって！！」

「ハイハイ、聞いてます。聞いてますっつてば。耳にタコが出来るくらい聞きました」

倉橋慧くらはしけいは、はあと息を吐いて友人の松永和世まつながかずよを呆れたように見遣った。

しかし、和世は慧の言う事など聞いちゃいなかった。ますます興

奮したように言い募る。

「転校生、男の子なのよ。男の子！ 絶対、格好良いに決まってる。どうやってお近付きになるうかしら！」

「絶対カッコ良い、って……。和ちゃんだって顔見た事ないんでしょ？ 何でそんな事断定出来るのよ？」

「何言ってるのよ、慧！ 転校生よ、転・校・生！ そんじよそこらの男子とは訳が違うんだから！！」

「一緒にゃん、と言う慧の心の中の呟きは、幸いな事に口をついて出る事はなかった。

和世の顔が、なぜか輝いて眩しい。

「転校するって事は、きつとお父さまの仕事の関係よね。あ、って事は、きつと貿易商か何かだね。その一人息子なんだから、これまでは家庭教師か何かが付いてたのよ。でも、彼は同じ年頃の友達が欲しかった……。だから、お父さまにお願いするの。」

『私は、高校に行きたいのです！』

『いやいかん、我が息子よ。我が息子であるからには、私の傍で勉強すべきだ。高校など行っても、墮落したヤツしかいない。私は、お前に跡を継いでほしいのだ』

『お父さま、そんな言い方はあんまりです！』

そう言つて、彼は家を飛び出し、この袖富高校に

「ちよ、ストップ、ストップ！」

永遠のごとく続く和世の話を、慧はかろうじて止める事が出来た。

和世は、きよとんと首を傾げて見せた。

「なに？」

「『なに？』じゃない！ 和ちゃん、それ、ただの妄想でしょ。声色いろや身振り手振りまでして、演劇部の本領を見せてくれなくても良いから」

和世は、少しばかり残念そうな顔をする。

「えー。これからが良いところだったのにー」

「分かったから。いちいち妄想しなくても、転校生ならすぐ見れる

じゃない。来るの今日なんだから」

「ハイ」

間延びした返事をする和世に、慧はただ項垂れるしかなかった。和世は、見た目はどこにでもいるような普通の女子高生なのだが、中身ときたら、暴走族も脱帽するほど妄想が暴走するのが常だ。さしずめ、妄想族とでも言っておこうか。

妄想する本人は至って元氣いっぱいなのだが、付き合わされる慧の身としては、あまりに細部にまで妄想が及ぶので、一瞬真実かと思つて気が休まらない。

結局のところ、精気を吸い取られてしまつたのだつた。

予鈴が鳴つて、それと同時に、いつもは授業が始まるギリギリ前にしか現れない担任の社会科教師の堀内が入ってきた。生徒を一人連れて。

「皆、席に着けー」

教室は、すぐに静寂に包まれた。生徒全員が、転校生に注目している。

堀内は、コホン、と咳払いをした。

「今日から、新たに入る事になった岩井だ。…じゃ、簡単に自己紹介して」

はい、と転校生はうなずいた。

「初めまして。岩井文也いわいぶんみやと言います。一応、京都から来ました。これから、よろしくお願ひします」

につこり。

文也は、背後に花が飛ぶかと言う勢いで微笑んだ。

健康的な白い肌、男の子にしては少し長い髪、そして、妙に深い瞳。可愛らしい顔をした文也は、見た目通りの笑顔をした。

女の子たちはうつと見つけている。

しかし、慧だけは違った。

どこか、冷めた目で、これから級友クラスメイトになるその男の子を値踏みしていた。

文也が可愛らしいほどの童顔なのは、百歩譲って許せる。

だが、華奢な手足と言い、軟弱そうな雰囲気と言い、どうもいけ好かない。要するに、胡散臭いのだ。

「皆、慣れない事もあるだろうから、教えてやれよ。じゃ、席は

」

堀内は、そう言葉を切って教室を見回した。女の子たちは、無言で熾烈な圧力をかけ合う。

誰もが、この可愛い転校生の隣になって、あわ良くば友達になりたいのだ。

慧だけが、もう興味を失ったかのようにそっぽを向いていた。

「 倉橋！」

「 え？ はい」

急に名を呼ばれて我に返ると、堀内は、爽やかに微笑んでいた。

「 お前の横、空いてるだろう。しばらく面倒見てやれ」

「 …分かりました」

女の子たちの痛い視線に辟易しながら、慧は、うなずいて文也が来るのを待った。

少し大きめの真新しい制服に身を包んだ転校生は、席に着くとにこりと笑った。

「 名前、何て言うの？」

「 倉橋慧」

無愛想に短く答えると、文也は「これからよろしくね」と更に笑みを深めた。

しかし、その笑みは、すぐに引っ込んだ。何かに気付いたかのようになり、じいっと慧の顔を見つめる。

「 な、なに？」

あまりにじっと見つめられるので戸惑って訊くと、文也は、妙に確信ありげに、真剣な顔付きで呟いた。

「 良い相だ」

「 は？」

「倉橋さん。今日、きつと良い事あるよ」

極上の笑みを頬に乘せて、文也は慧に言った。

何を言っているのか、意味がさっぱり掴めない慧は、文也に聞き質そうとした。

「ちよ、それって」

「授業始めるぞー」

堀内が、ちょうどタイミング良く口を開けた。

しんと静まり返る教室で会話をしては、目立つ。慧は、文也に訊きたいのをぐつと堪えて黙った。

本日の第一限は、中国史だ。蓬萊史ほうらいしと中国史は必須教科で、その内の中国史は、大抵高二で学習する。四千年以上もの膨大な歴史を、事細かに覚えなくてはならないので、結構大変だったりもする。

しかし、慧は、先程の文也の言葉が気になって、なかなか集中できなかつた。

「うつわー。すっげえ女子の山」

慧は、机に頬杖を付きながら投げやりに呟いた。

一限が終わった直後から、文也の周りには女の子が群がっていた。それは、放課後になってからも衰える気配はなく。

寧ろ、他学級からも集まって、收拾がつかない状態になりつつあった。

隣の席の慧は、目の敵にされ、完全に蚊帳の外だ。

もともと、加わる気は更々なかつた慧としてはありがたいのだが、正直、女の子たちが自分の席にまではみ出していて、女子の群れから出られない。

言葉遣いも雑になろうと言うものだ。

「なんだ。転校生って、お前のクラスだったんだ」

不意に耳元で囁かれて、慧は、息が止まるほど驚いて振り返った。

そこにいたのは、慧と同じ生徒だった。

胸の校章の色が違ふ事から、慧より一学年上の三年生である事がわかる。

「従兄だとわかると、慧は、目を据わらせた。」

「驚かさないでよね、タツキー」

「タツキーって言うな！ タツキーって!!」

タツキーこと、灌沢脩一は、唇を尖らせて文句を言った。

巷を騒がせているアイドルと、名前と容姿が似ている事から付けられた渾名を、彼は、倦厭していた。

と言つても、内心では得意になっているから、本気でその渾名を正そうとした事はない。

慧も、それを分かっているから、からかってそう呼び続けているのだ。

「仮にタツキーって呼ばないとして、じゃ、何て呼べば良いのよ？」

慧がそう訊くと、脩一は、ふんぞり返って言った。

「敬意を込めて『先輩』と呼べ」

「はいはい。灌沢センパイ」

慧は、馬鹿にしたように言つてやる。

脩一は、自分で言つておきながら、慧があつさり「先輩」と呼んだ事に、しかも、名前ではなく、名字の方で、予想外のシヨツクを受けていた。

ガァン、と言う効果音が聞こえてきそうだ。

肩を落として、脩一は呟いた。

「…やっぱ、いい」

「なにが？ セン・パ・イ？」

慧は、白々しく「先輩」と呼ぶ。勿論、嫌がらせ以外の何物でもない。

そんな従妹の性格を誰よりも把握している脩一は、遊ばれていると分かつて、拗ねたように言った。

「従妹のお前にまで先輩って呼ばれるのは、やっぱり不愉快だ。も

う、タツキーだろうが、脩一だろうが、好きに呼べよ」

慧は、あまりに可哀想だったので、くすくす笑って脩一をからかうのをやめた。

「で、脩一。何の用？」

「一緒に帰ろうと思って、迎えに来ちゃ悪いのかよ？」

「そんな事言っていないってば」

半ばいじけ気味な脩一の機嫌を取るように、慧は言っ、やれやれと息を吐いた。

従兄とは言え、学年は一つ、年は二つしか離れていないのだ。

お互い、気安い間柄でもある。だから、脩一は、こんなに情けない姿を慧に見せているのだろう。

「……って言うのは、さて置き」

脩一が、不意に真面目な顔をして、改めて慧に向き直った。慧も、大人しく話を聞く姿勢になる。

「今日、父さんがウチに来たってさ」

「伯父さんが？」

うん、とうなずく脩一を見て、慧は、首をかしげた。

明日だったら、どうせ脩一の家に行く予定だったから、特に驚かなかったが、今日わざわざ呼ばれるのは解せない。

「やっぱアレかなー。ホラ、今日って、俺の誕生日だから！」

覚えてるか、覚えてるよな？

そう、迫ってくる脩一に「ハイハイ、おめでとう」と、全く心のコもっていない祝いの言葉を贈る。

明日なら、脩一の誕生日会をするから、呼ばれても納得できるのだが。

一体何の用だろう。

慧は、教科書を鞆に詰め始めた。

教科書類は律儀に全部持って帰っているから、結構重量はある。

しかし、それを物ともせず、慧はひょいっと肩に鞆を掛けると、生返事されて落ち込んでいる脩一に声をかけた。

「用意できたよ。帰る」

慧は、声をかけ、脩一を置いてさっさと出て行くつもりで、その後を、脩一が復活して追いかけていく。

「おい、待てよ。絶対そうだって！ やっぱ、俺の誕生日だからだつて！ なあ、慧。なあつてば」

「あーもうウザイ」

軽く耳を塞ぎながら、慧は、半ば本気で呟く。

何だかんだと言いながらも仲良く二人で教室を出て良く後ろ姿を、転校生がじつと見送っていた。

- - - - -

華王朝が清王朝に変わってからは、九十五年以上がゆうに過ぎている。

ここ蓬萊列島は、中国の東の端にある列島である。

中原の人々からは『東の蓬萊、西の崑崙』と並び称されている神獣と神仙の住まう国とされている。

しかし実際のところ、住んでいる人々の内でその神話を知っている者など、数えられるほどしかない。

科学が発達し、神獣と言った非現実的な生物の存在などは、オカルト雑誌やテレビのワイドショーくらいでしか持て囃されないのだが、しかし、慧は知っていた。

その神話が決してただのお伽話ではないという事を。

「…いつ見ても、大きい家ねえ」

脩一の家を見る度に、慧は、溜息を吐いてしまう。

瀧沢家は、知られてはいないが相当の名家だ。

それこそ、蓬萊国が出来る前 秦始皇の時代から、形ながらも

あつたと言つ。

そうして、内々に代々の天皇、ひいては、中国皇帝の保護を受けてきた。

なぜ、そのように保護を受けてきたのかといえは、それは、瀧沢家の司る裏の職種にあつた。

それは、古代から現代に至るまでの最大の秘事だ。国家機密でもある。

「まあ、坊ちやま。慧お嬢ちやまも。お帰りなさいませ」
出迎えたのは、家政婦の清美きよみだつた。

瀧沢家は、広いから、お手伝いがいないと管理できない。
勿論、彼女も、代々瀧沢家で家政婦をしているのだ。

そうした環境で成長した脩一は、にこやかに「ただいま、清美さん」と返したが、慧は、いつまで経つても慣れなかつた。

「こ、こんにちは。清美さん」
清美は、ペコリと頭を下げた慧に微笑んだ。

「まあまあ、丁寧にありがとうございます。慧お嬢ちやま」
「お嬢ちやまは止めて下さい」

いつも言ってますけど、と慧は眉を下げる。
はいはいと清美は生返事をするだけで、清美は聞かなかつた。こ

れも、いつもの遣り取りだ。
「旦那様。お帰りになりましたよ」

清美は、奥に声をかける。

ふたりの異邦人…？

出てきた伯父の総一そういちは、一見すると、ただのしがなしがない国家公務員にしか見えなかった。

しかし、彼が、瀧沢家の現当主である。

総一は、二人を見ると、顔を綻はなばせた。

「やあ、慧ちゃん。良く来たね。脩一もお帰り。さあ、上がって上がって」

総一に簡単に挨拶を済ませて、玄関から上がり込む。

廊下を渡り、座敷に行くと、人が沢山集まっていた。

「おや、慧。思っていたよりも早かったなあ。脩一君も、誕生日おめでとう」

真つ先に二人を見つけて寄ってきたのは、慧の父の綾次りょうじだった。

因みに、総一の弟である。

「ありがとうございます。叔父さん」

脩一は、神妙な顔でお辞儀をする。

慧は、あれ、と思った。

「何で父さんまでここに居るの？ タッキーの誕生日会なら、明日でしょ？」

「父さんだけじゃなくて、ハルちゃんも呼ばれてるんだよ。ホラ、あそこ」

「ハイ」

座敷の奥から、不惑の年に近付こうとしているのに、なお小娘のように華はなやいでいる母の深陽みはるが手を振っている。

げんなりしながら、慧は、手を振り返した。

「どうして？ いくら、私たちが瀧沢家とは縁が深くて、今日は呼ばれないはずでしょ。父さんも、瀧沢の人間じゃなくなっちゃったし」

今日は、瀧沢本家の跡取り息子の十八の誕生日。

血が濃かろうが、薄かろうが、瀧沢の姓を掲げる者以外は、呼ばれる事はない。

それなのに。

疑問符で頭の中をいっぱいにさせていく慧の様子を見て、総一が何気なく答えた。

「実は、倉橋の人間を呼ぶように言ったのは、私じゃないんだ。龍^{りゅう}姫^{ひめ}なんだよ」

「龍姫が!?!」

瀧沢家は、太古の昔から、ある事を司っている。

それは、この国が神獣と神仙が住まう国と言うお伽話と、大いに関係が有る。

お伽話ではないのだ。

蓬莱国には、華王朝の皇帝を嘉^{よみ}する神獣が生活しており、その神獣を護り育てる神仙と呼ばれる人間がいるのだ。

そして、その姓からも分かる通り、瀧沢家は、『龍』に関わる神仙の一族なのだ。

龍姫というのは、その地上にいる龍を束ねる長老格の老婆だ。

龍姫自身、数千を生きた黄龍らしいが、本性を見た者はいないので定かではない。

龍姫と言う名自体が、名ではなく、通称なのだ。

慧に至っては、物心つく前に一度会ったらしいのだが、記憶にあるはずもなく、後は話に聞くだけだ。

父も、瀧沢の人間で総一の弟だったとは言え、倉橋家に婿入りした時点で瀧沢の人間ではなくなっている。

未だ神仙の地位を保持し、その上当主と誰よりも血が近いと言っても、このような一族が集まる場に呼ばれる事はなくなった。

おそらく、深陽と結婚してからは初めてなのではないだろうか。

そんな彼を　しかも、家族揃って　龍姫がじきじきに呼び出す

など、そうそうある事ではない。

しかも、今日は脩一が神仙となる日だ。

蓬萊の法律で言えば成人するのは二十歳なのだが、古くからの慣例では十八歳と言う事もあり、十八歳の誕生日に神仙として、昇仙しょうせんする事になるのだ。

そして、神仙となれば、おのずと龍の雛を育てるようにと一匹預けられる。

今日は、瀧沢家にとって、何よりも大事な日なのだ。

それなのに、そんな日に、瀧沢について知っているとは言え、部外者の慧たちが呼ばれている。

慧は、首を更に傾げた。

「私たち倉橋家の人間まで呼ばれるなんて、大ごとね。でも、神仙の父さんならともかく、私や母さんはいなくても良かったんじゃない」

「そちが居らぬと話にならんのじゃ、慧」

静かな声が、背後から響き渡った。

座敷に入ってきた老婆を見て、皆は一斉に静まり返る。

真白の髪。皺だらけの黄ばんだ肌。曲がった腰。しかし、眼は炯々と光って、威厳があった。

老婆　龍姫は、意外にしっかりした足取りで上座に着いた。

口を、開く。

「今日、皆を呼び出したのは他でもない。神仙となる者たちを、皆に知らせるためじゃ」

慧は、自分の事でもないのに、固唾を呑んだ。

脩一が神仙となる、そんな大事な場面に自分がいるかと思うと、自然と背筋が伸びてくる。

同時に、自分が呼ばれた意味が更にわからなくなる。何か、これから龍姫が言う事と関係があるのはわかるのだが。

龍姫は、ぐるりと周囲に視線を送ると、一番末席にいた慧にピタリと視線を据えた。

慧は視線を合わせられて戸惑った。

「先頃、天帝より命が下った」

天帝からの命、と言う言葉に、ざわめきが起こる。

神仙は、天帝からの命を受けて拜命すると言う形を取ってはいるものの、実際はただの形式に過ぎず、十八になった者から順次拜命する事になっている。

大袈裟な儀式もない。長い歴史の間に、すっかり慣例化してしまったのだ。

しかし、それが、直接天帝からの命が下ったのだ。

その事を、一応は知っている慧にも、事の重大性が理解は出来たが、それと納得出来たかは別だ。

ざわついている人たちの感覚が掴めなかった。

龍姫は、スウと息を吸うと、衝撃の一言を放った。

「常ならば、脩一だけじゃ。しかし、此度は、そこに座する倉橋慧にも神仙の地位を与えよ、と」

「えっ？」

一瞬、辺りが静まり返った。

神仙となれるのは、血が濃かろうと、薄かろうと、『瀧沢』の名を持つ者だけ。

秘事を知る事は出来ても、関わる事は出来ないはずだった。

それなのに、今、瀧沢家の人間ではない慧にも神仙としての命が、それも、天帝自らの下知があったのだ。

呆然としてしまうのも道理だろう。

それこそ、前代未聞だ。

総一も脩一も、聞かされていなかったらしく、ポカンと口を開けて理解できないでいる。

龍姫は、慧を見つめて仄かに笑んだ。

「異例なのは、天帝御自身もご承知じゃ。なれど、命は命。逆らう事は出来ぬ。皆、心するように」

何故、自分がこの場に呼ばれたかは、これではつきりした。

しかし。

「龍姫！ どうしてなんですか？ どうして、私まで」

慧の声に、その場にいた全ての人間の視線が突き刺さる。妙な視線だった。

龍姫は、声を上げた慧に、チラと視線を向けた。

「納得がいかぬのは道理じゃろう。しかし、我も此度の雛は脩一だけでは心もとなかったところでのう。慧が拝命すれば、安心と言うものじゃ」

「でも」

「反論は許されぬ。すまぬな、慧」

皮肉げな笑みを片頬に刻むと、龍姫は、ピシヤリと言った。

「今日呼び出した件は以上じゃ。皆、ご苦労であった」

その一言で、皆はざわめきながらも立ち上がった。

今回は、異例続きだ。

ひとりの雛に二人の神仙がつくと言う事自体滅多にない事である上に、その二人の内の一人は『灌沢』の人間ではないのだ。

どうしてこのような事態になったのかは誰にも おそらく、龍姫以外の誰も知らないだろうが、これまでの歴史の中でなかった事態である事は確かだ。

おそらく、一時間もしない内に、他の神獣や神仙の一族にまで知れ渡る事になるだろう。

慧は、ポツリと座って呆然としていた。両親が先に帰ると言ったのにも気付かないほどだ。

放心状態なのは、脩一も同じだ。

まさか、従兄妹で神獣の面倒を見るように言われるなんて。

脩一と、思わず顔を見合わせてしまう。

「さて。脩一、慧。…そう、固くならずとも良い。雛を育てると言うても、大した事ではない。特別な事はせずともよい。ただ、心の赴くままに導いてくれればよいのじゃ。我は、そちらに期待してるゆえ、な」

そう、龍姫は、意味深に微笑むと、すくつと立ち上がった。

「二人とも、ついて来なさい。雛に引き合わせよう」

ずりずりと足を擦るようにして、龍姫は歩き始めた。

龍姫は、この瀧沢家の中で生活している。それこそ、『神』だから、下にも置かないような待遇だ。

幼少期を天界で過ごす雛も、神仙がつくししばらく前から、龍姫の元で必要最低限の「人間として生きる知識」を教えられるために、この家にいる。

龍姫の住まいは、瀧沢の邸の奥にある小さな離れだった。しかし、小さくとも、神の住まい。清浄な空気に包まれ、きちんと掃除がなされて清潔だ。

「こんなトコ、初めて来た」

瀧沢家には幼い頃から出入りしてきたはずの慧の呟きを聞いて、総一が笑った。

「そうだろうね。ここは、瀧沢の人間と神仙しか入れない」

慧の父は、一応入れるらしい。

今は、倉橋の人間だから、龍を育てる事はなくなったが、たまに父に育てられたと言う龍が家に遊びに来たりする。

だから、龍を見た事が無い訳ではなかった。

しかし、今、慧の胸は期待に溢れていた。龍の雛って、どんな子なのだろう。

龍姫は、二人を見比べて、ニツと笑った。

「難儀な仔こでの。少々手はかかるやもしれぬが、根は良い仔じゃ。よろしく頼む」

慧と脩一は、顔を見合わせるとコクリ、と肯いた。

「これ、おいで。出ておいで」

龍姫は、離れの中へと呼びかけた。

ガタンツと一度、中で大きな音がしたが、後はシーンと静まり返っている。

息を凝らしているような気配がした。

はぁ、と龍姫は大きく溜息を吐くと、二人へと振り返った。

「人見知りかひどくてのう。…どれ、呼んでこようかの」

ガラリと戸を開け、龍姫は中に入っていく。

中に入ってしばらくして、どつたんばつたんと物凄い音がし始めた。何か、凶暴なものが暴れているような音だ。

慧と脩一は顔を見合わせた。なぜだか、嫌な予感がしてしまふ。

皆が、龍姫の身を心配し始めた時、龍姫が、肩で息をしながら誰かを伴って現れた。

「……さあ、皆に挨拶しや」

雛は、龍姫の小さな背に、隠れるように縮こまってくっ付いている。

龍姫が小さいので、隠れきれてはいなかったが。

「……………」

雛は、何も言わない。

見えるのは、真っ黒のポニーテール。同じく、黒い清服。

龍の雛、と聞いて、何か変わったところがあるのではないかと期待していた慧は、容貌は普通の子と変わらなさそうだったので拍子抜けした。

そして、首をかしげる。

龍姫と格闘していたらしいのは、本当にこの子供なのだろうか。

脩一が、気合の入っている顔で、慧に囁く。

「この雛に気に入ってもらえたら、この雛を引き取る。良いな？」

「……オツケー」

別にそんなのどうでも良いんだけど。

そもそもなりたくて神仙になった訳ではない慧は、そう思いながらも渋々うなづく。

面白そうだとは思いが、どうしてもやりたい訳ではないし、そもそも、自分の意志などどこにも無いのだ。

これで、この龍の雛が脩一を選んでくれれば、脩一に全て任せて無問題モトモンタイなのだが。

「……俺は、瀧沢脩一」

「私は、倉橋慧。あなたのお名前は？」

我ながら、小さい子に対するような甘ったるい喋り方になったと、内心苦くなる。

「……………」
雛は、やっぱり何も言わない。

しかし、興味が無い訳ではないのだろう。じっと見つめる視線を感じる。

無視はされていないのだろうか、案外、それよりも質が悪い。返事をしてくれる様子がないのに、慧の眉根が寄る。

「ホラホラ、声を聞かせてくれよ」

脩一は、芸能人も真つ蒼のスバラシイ笑顔を見せている。

ふと、雛が顔を上げた。

整った顔立ちの、見た目は一二、三歳ほどの少年だった。

脩一をチラと見ると、か細い声で龍姫に呟いた。

「……………わ…私は…、男は好かぬ。神仙がその者なら、嫌だ……………」
ピキッと、脩一の爽やかな笑顔が凍りついた。

慧は、その言葉を聞いて笑った。大いに笑った。泣くほど笑った。

おーおー、言うじゃないの、このヒナちゃんは。

龍姫も、若干顔を引き攣らせながらも、「では、慧じゃな」と呟いた。

慧は、にっこりと笑う。

「良かったわねえ、ヒナちゃん。本当は、タツキーもあなた付きの神仙だけど、男が嫌いだって言うなら、私が引き取ってあげるわ。

タツキーのこんな顔見れたし」

雛は、じつと慧を見つめた。

「……………け、慧も、神仙なのか…?」

「そうよ。…ところで。ヒナちゃん、って呼ぶのもナンだから、いい加減名前教えてくんないかな」

慧がそう言うと、雛は、ふいとそっぽを向き、ぼそりと言った。

「……………黎貴……………」

「ふうん。黎貴って言うんだ。カッコ良い名前じゃない」

「……………」
黎貴は、顔を隠した。チラリと見える耳が、真っ赤になっている。照れているらしい。

慧は、少なからず安心した。

喋れない訳じゃなさそうだし、反応も素直だし。

まあ、これなら、少し人見知りか激しいだけで手間はかかんないかな。

慧に懐いたと判断したのだろう。龍嫗は、黎貴を自分の背後から、前へと立たせようと押し出した。

「のう、黎貴。もう、この婆が居らなんでも大丈夫じゃろう？ 慧の傍に行きや。慧がこれから面倒見てくれるのでう」

「え、ここから…、出て行かなくてはならないのか…………？」

黎貴は、へっぴり腰で龍嫗の背後から出て行く事を拒んでいる。

そんな仕草に、ピクツと、慧は眉を動かした。しかし、強いて笑顔を作る。

「出てきなさいよ。怖くなんかない。私がいるし。ウチの父さんも母さんも、優しいからさ」

「……………」

まただんまりかよ。

慧は、こめかみに血管が浮いてくる気がした。

ふたりの異邦人…？

そんな慧を、敏感に察知したのだろう。黎貴は、ますます身を縮こめた。

「……慧、怖い……」

ブチツと、慧の中の何か切れる音がした。

前言撤回。

こんだけ人見知りで、臆病で、女々しいヤツ、手間がかからない訳がない！

「誰が怒らせてると思ってんの！ 臆病で女々しい男なんか、大ッ嫌い！」

ビクツと黎貴は、怯えて体を竦めた。その黎貴の様子に、慧は、更にイライラが募る。

不意に、チラツと途轍もなく落ち込んでいる脩一を横目で見た黎貴に、慧はピンと来て、目を据わらせた。

「…今、やっぱり脩一が良かったなって思ったでしょ…？」

黎貴は、ぎくりと背を波立たせた。

凶星だったらしい。

不穏な慧と黎貴に、総一と龍嬸はハラハラして見守っている。

「自分で断つといて、今更『やっぱり良かった』なんて、脩一に失礼だと思わないの！？ 私は、強制しなかったでしょ。自分で選んだんだから、後で変えないの！」

「……………」

その言葉を聞いて、黎貴は、非が有ると悟ったのだろう。しよんぼりと頂垂れた。

そんな遣り取りを見ていた総一と龍嬸は、顔を見合わせた。

この様子なら、大丈夫だろう。

慧は、黎貴がしょぼくれているのに気付いて、ふう、と息を吐いた。

「私だって、怒りたくて怒ってんじゃないわよ。あんたの事を思
って怒ってるのよ」

「……私のため…？」

黎貴は、恐る恐る訊く。慧は大きくうなずく。

この小さくて人見知りで、手かかかであるう雛にはこれから苦
労しそのだが、黎貴が自分を選び、自分もそれを受け入れたのだか
ら、彼のために頑張ろうと思う。

慧は、そう覚悟を決めたのだ。

「勿論。私は、あんたの神仙なんだもん。どんな場所でも、胸張っ
て生きて欲しいの。臆病者にも、卑怯者にもしたくない。私は、い
つだって、あんたの事を思ってるんだからね」

「……そう、か……」

黎貴は、龍姫の背でなぜか小さく笑ったようだった。

慧は、少し疲れたように再度言った。

「さ、黎貴。いい加減龍姫から離れて。いつまでもしがみ付いてち
や、龍姫が迷惑よ」

「……………」

黎貴は、少しためらう素振りを見せたが、おずおずと龍姫の背か
ら手を離し、慧の前へと出てきた。

龍姫は、眼を見開く。

まさか、こんなに素直になるとは予想していなかった慧も、瞬間、
目を見開いたが、すぐに微笑んだ。

「良く出来ました」

まずは、この臆病な雛の第一歩だ。

自分で、自分の力で、前に出てくる事。

慧は、サツと黎貴の手を掴んだ。驚いて反射的に引っ込めようと
する黎貴の手を、ますます強く握り締める。

「さあて、家に帰りましょ。今日は、母さんがご馳走たくさんで待
っていてくれるハズよ。じゃ、龍姫、伯父さんお邪魔しました。タ
ッキー、また明日」

踵を返すと、途端に自分が空腹な事に気付いた。慧は、黎貴にこりと笑いかける。

「これから、よろしくね」

黎貴は、まだまだ固い表情で、コクリと肯いた。

灌沢家を後にする。慧の家は、灌沢家からさほど離れている訳ではなかった。歩いて十分もあれば余裕で着いてしまう。

しかし、どこに連れて行かれるのかいまいち把握していない黎貴は、不安で落ち着かなく周囲をきよきよと見回していた。

初めて見る外の景色と言うのもあるからかも知れない。

意を決して、ボソツと訊こうとする。

「……あの……、どこ、に……？」

慧は、ギロリと一瞥をくれる。

早速、教育的指導をする事となりそうだ。

「何か言いたい事がある時は、ハキハキ喋ること！ 聞きにくいでしょう」

「………」

コクリ、と黎貴はうなずくが、慧は厳しかった。

「返事は！？」

「……はい……」

慧の今の言葉の効果からか、黎貴は少しだけ大きな声で返事をした。それでも、まだまだ小さな声ではあったが。

しかし、素直に言う事を聞いてくれると言う事は、それだけ自分を信用してくれているのだ。

そう思うと、慧は少しだけ嬉しくなる。

ふと、気付いた。

黎貴の手が、緊張と不安のあまりに震えている。それが、繋いだ手から伝わってきて、慧は表情を和らげた。

流石に、不安になるのも無理はなかったか。

「これから、私のウチに帰るのよ」

「……慧の、家……？」

「そう。あんたの家にもなるんだからね」

「…私の、家に……」

分かつているだろうに、不思議そうに言う黎貴が可笑しくて、慧は笑った。笑うと、愛敬がこぼれて可愛らしい。

「もう。一緒に暮らすつてのはそう言う事でしようが。先に父さんが帰つてはるはずだから、あんたの部屋も用意してくれてるんじゃないかな」

気兼ねせずに暮らしてよね。

慧はそう言つて、ピタリと足を止めた。

閑静な住宅街の中にある小さな家。大きな邸宅が並んでいるその中での大きさは不釣り合いだったが、普通の住宅と呼ぶには良い家だ。綾次が外務省に勤める高級官僚だからだろう。

「ここが私ん家よ」

慧は、笑つて玄関の戸を開ける。

そして、中に入るなり慧の顔が甘く蕩けた。

「やだ、ムーン！ ただいま。出迎えに来てくれたのぉ」

慧の変貌に黎貴が驚いていると、慧は「ムーン」を抱き上げた。

白い体に頬をすり寄せて、慧は黎貴に向き直った。

「黎貴、早速家族を紹介するわね。ムーンよ。お月さまみたいに綺麗でしょ」

それは、白い雄猫だった。

ごろごろと喉を鳴らして慧に甘えているが、慧が紹介してくれたのに気付いたのか、一瞬だけチラリと黎貴を振り返った。

ふん。

ムーンが鼻で嗤つたような気がして、黎貴は少しだけムツとしたいや、気のせいではないだろう。

黎貴は、曲りなりにも神「獣」なので、動物の声くらいは聞き取れる。しかし、今は聞き取りたくなかった。

黎貴の事は、恐らくムーンも神獣であるとわかつてはいるだろう。そして、同時に黎貴がヘタレである事も、慧に完璧に懐いてしま

っていると言う事まで。

動物は聡い。一目で黎貴が敬うに足る者ではないと看破してしまつたのだ。

じとつとムーンを睨みつける黎貴に、何を勘違いしたのか、慧はムーンの胸を持って黎貴へと差し出した。

「猫が珍しい？ 抱いても良いわよ」

「えっ……」

そんなつもりで見ていた訳では毛頭ないのに、なぜか反論出来ずに、黎貴はもごもごと何か口の中で呟くと、そろそろと手を差し伸べた。

ムーンに触れようとした、その時。

バリッ。

「ッ！」

突然、ムーンが威嚇したかと思うと、黎貴に爪を立てた。

「ムーン！」

慧が驚愕して叫ぶ。

ムーンは、身を擦って床にフワリと着地すると、黎貴を一瞥して部屋を出て行った。

俺様に触るな。

チラリと見た時に、ムーンがそう言ったような気がして、黎貴は啞然とするしかなかった。

これまで、ここまで神獣を敬わなかった動物がいただろうか。

一方、慧は慌てて黎貴の手を取る。

「ちよつと、大丈夫！？ やだ！ 血が出てるじゃない！」

「血……！？」

そう言われて、ギョツと指を見つめると、人差し指に斜めに蚯蚓みみず腫れはが走っている。

それに、薄っすらと紅いものが滲んでいるのが見えて、驚愕のあまりそれまで全く感じていなかった痛みが襲ってきた。

傷の痛みを実感すると、怖くて痛くて泣きたくなる。

「…痛い……！」

「もう、こんなの大した傷じゃないわ。泣かないの。…手当てしてあげるから、居間に行きましょう」

そう言つて、玄関で靴を脱ぎ始める慧に、声がかげられる。

「やあ、慧。お帰り。…そつちは雛だね？ ようこそ、倉橋家へ」

玄関での騒ぎを聞きつけて、綾次が出迎えに来た。

初めて見る人間に、黎貴は人見知りをして慧の後ろに隠れてしまふ。慧の背から、綾次をチラリと窺う。

綾次は、黎貴のそんな行動に少し面食らつたようだった。

神獣にも色々な性格の者がいるのは勿論わかつてる。しかし、

「神」獣なのだから、大抵は怖いものなどないと言つ顔をして地上に降りてくる。

人間を恐れなどしないから、人懐っこい神獣も多い。

まさか、人見知りをすると言つ事は起きないのが常なのだ。

「…えつと…？」

戸惑つた綾次を見て、慧はまたピクリと眉を吊り上げる。しかし、まずは黎貴の傷の手当の方が先だ。

黎貴に靴を脱いで上がるように言い、綾次に向き直る。

「ただいま、父さん。紹介は後で母さんと一緒にさせるわ。…黎貴がムーンに引つ掻かれちゃつて…。救急箱つてどこにあつたっけ？」

「えっ！？ 怪我をしてるのかい！？ そりゃあ大変だ」

綾次は、慌てて奥へと引つ込んだ。救急箱を取りに行つてくれるのだらう。

その間に、慧は黎貴を玄関から真つ直ぐに伸びている廊下の突き当たりにある居間へと連れて行く。

居間のソファには、我が物顔で寝そべっているムーンがいた。体勢がふてぶてしい。

今度ばかりは、慧も叱らざるを得なかった。

「ムーン。そこをどきなさい。もう、黎貴なんて事するのよ」
残念ながら、随分と甘い説教になつてはいるが。

ムーンは、心外だとも言いたげな顔をして、渋々ソファから降り、自身の第二の定位置、テレビの上へとひらりと身軽に飛び乗る。「ホラ、黎貴。座って傷見せて」

ソファに座った黎貴は、恐る恐る慧に傷を見せる。蚯蚓腫れは痛々しいが、それほどひどいものではないし、血はもう止まってかさぶたも出来始めている。

これなら、手当ての必要もないかもしれない。

「…痛い…」

「めめめそしないの。男でしょ」

「慧。救急箱だよ。…傷は大した事はないのかい？」

救急箱を取りに行った綾次が、箱を持って入ってくる。

黎貴は、逃げたそうに腰を浮かせたが、慧に手を掴まれている上に、じいつと見つめられていて動けずに、綾次の接近を許すしかなかった。

「うん。消毒して絆創膏貼れば大丈夫」

慧は、救急箱を受け取ると、テキパキと消毒液を出して、液を浸した綿を黎貴の傷へと押し当てた。

消毒液が傷に染みるのはどんな生き物でも等しく同じなので、黎貴も当然ビクツと手を引つ込めて泣きそうになった。

「…痛い…！」

「あつ、いやつ、慧！ もう少し優しく手当てしてやりなさいっ」
見ている綾次がおろおろと言うのに、慧はきっぱりと返す。

「これくらい、大した事ないわ。…父さんも、あんまり甘やかさないで」

「…慧。初日からそんなに厳しい事を言わなくても…」

意外に教育熱心な愛娘に、感心を通り越していつそ呆れてしまう父である。

神仙の「先輩」としては頼もしい限りだが。

ぺたりと絆創膏を貼ってやり、慧は初めてにっこりと笑った。

「はい、これでよし。しばらくは剥がしちゃダメよ」

「…分かった…」

黎貴は、絆創膏を物珍しそうに見つめてから、コクリと素直にならず。

そんな様子を見て、綾次は目を見開いた後に苦笑する。

我が子ながら、飴と答の使い方が巧うますぎる。

「さて、じゃあ夕食にしよう。ハルちゃんが、張り切って用意してくれているよ」

綾次は、先頭に立って台所へと向かう。後に続くのは慧、黎貴。最後尾はムーンだ。

食卓の上には、溢れんばかりの料理が乗っていた。

いそいそと料理の皿を置いているのは、ピンクのフリフリエプロン姿の深陽だ。

不惑の年になろうと言うのに、なぜか似合ってしまうそのエプロンが憎い。

三人に気付いて、深陽はにこにこしながら近寄ってくる。

「お夕飯の用意、出来てるわよ。あら！ まあまあまあ」

ふと、黎貴に気付いた深陽が妙な声を上げて顔を近付いてきた。

黎貴は、突然の事にびっくりして、慌てて体を引く。

「慧！ この子が龍の雛ちゃんね！？ ようこそ、倉橋家へ！」

「……………」

黎貴は、やはりと言うか、予想通りに無言だった。

ピクリとこめかみをヒクつかせた慧は、何も言わずに黎貴を肘で小突く。

黎貴は、強くはなかったものの肘鉄にビクツとして、慌てて、しかしおずおずと口を開けた。

「……は、初め、まして……。れい、黎貴、だ……」

どもりながらの小さな声での挨拶だったが、それでもしてくれた事に満足して、慧はうなづく。

綾次と深陽は、顔を見合わせるとにっこりと微笑んだ。

「初めまして。私は慧の父の綾次」

「私は慧のお母さんの深陽よ。ハルちゃんって呼んでね」

「……わ、かった……」

黎貴は、目を白黒させながら深陽の迫力に圧されて返事をする。

慧は、母にうんざりして大きな息を吐く。この母は、もう良い年なのに、いつまでも小娘のようだ。

挨拶を交わした事で、少しだけ黎貴の中の緊張と人見知りは薄れたようだった。

まだまだ自分から近付くには至らないが、少なくとも、慧に背を押されなくても向き合える覚悟はついたらしい。

「……慧……」

黎貴が、不意にポツリと呟く。

なに、と倉橋家の人間が全員黎貴の口元に注目した。黎貴は、その事に少し怯えながらも言う。

「……甘い、匂いが……」

「甘い匂い？」

慧が、聞き返す。くんくんと空気を嗅いでみると、確かにバニラの甘い匂いがする。

その瞬間、深陽がオープンへと走った。

「いけない！ スポンジケーキ焼いてたんだっわ！」

お菓子作りが趣味の深陽は、黎貴の歓迎のために、料理もさる事ながらケーキも一緒に焼いていたらしい。

「……ケーキ……」

不思議そうに呟く黎貴に、慧はあれと聞き返した。

「黎貴、ケーキ食べた事ないの？」

コクリと黎貴はうなずく。横から、訳知り顔の綾次が説明する。

「雛が地上に降りるまで暮らす天界は、古代中国神話の世界だからねえ。知識にはあっても見た事もないものなんてたくさんあるんだよ」

「へえ〜」

慧は納得する。

ケーキは西洋から入ってきた食文化だ。見た事も食べた事もなくて当然だ。

瀧沢家の龍姫はケーキなんて食べなさそうだし。

「ケーキはすごーく美味しいわよ。あの甘い生クリームが堪らないったら…」

慧の言葉に、黎貴が生唾を呑みこんだのが分かった。慧は、綾次と顔を見合わせて笑う。

「まあ、とりあえずケーキは夕食が終わってからだよ。…ハルちゃん、大丈夫かい？」

「ええ、後はデコレーションするだけ」

深陽が、焼き上げたスポンジケーキをオーブンから出して、台所へと再び入ってくる。

慧と黎貴が席に着くと、綾次がグラスにオレンジジュースを注いで回る。

全員が席に着き、綾次はグラスを掲げる。

「では…。倉橋家の新しい家族、黎貴君に乾杯！」

「乾杯！」

黎貴は、その言葉に小さく目を見開いたものの、微かに笑って同じくグラスを掲げたのだった。

龍との関係（前書き）

龍と仲良くなる方法。なんて言っても、そんな人間の場合と大して変わりません。それでは、灌沢脩一の場合はどうなのか？

龍との関係

次の日の放課後。

慧の周り　　と言うか、転校生文也の周りには今日も多くの女子が群がっていた。

「ねえ、岩井君の家ってどこら辺なの？」

「兄弟っているの？」

それこそ、質問は根掘り葉掘りだ。

頬杖を付きながら隣の席から眺めている慧も、流石に呆れて、よく続くものだと思っていた。

それだけ、文也の事が知りたくて堪らないのは分かるが。

「僕は、皆の事が知りたいな。教えてよ」

文也は、そう群がっている女子に質問し返し、おまけにその可愛らしい笑顔で質問を煙に捲こうとする。その事に、傍で聞いている慧には分かった。

周りの他愛無い女の子たちは騙せても、自分は騙されない。

話したくはないのだろうか。それとも、何か秘密でもあるのだろうか。

昨日の不可思議な発言が未だに頭に引っかかっている慧は、何だか面白くない。

どうも、この文也と言う転校生の全貌がはつきりしないのだ。

「よっ、慧。待たせたな」

ぼんやりと隣を眺めていると声が掛けられた。

一緒に帰るのがいつもの事となっている脩一が、教室まで迎えに来たのだ。

「じゃあ、帰ろっか」

慧は席から立ち上がり、脩一と共に学校を出る。

今日は、脩一は倉橋家に寄っていく予定なのだ。

黎貴の神仙となったのだから、一日でも長く黎貴と一緒に居たい

のは当然の事だ。

ましてや、人見知りをされているのだとしたら尚更だ。

一刻も早く馴れてくれなくては、神仙として傍にはいられない。

「今日は、黎貴どうだった？」

「どうって？」

急にそんな事を訊かれて、慧は質問の意図が分からずに問い返す。

脩一は、そんな慧がじれったそうに口を開けた。

「寝起きは良い方なのか？ 朝ご飯はしっかり食べてたか？ 好き

な食べ物？ 嫌いな食べ物？」

「はいはい、ストロップ！」

「人間の生活には馴染んでいそうか？ それから、それから」

慧は、脱力して待ったをかける。

脩一は、慧の制止にも気付かないように、まだ怒涛のように質問をする。

自分の話を聞いていないのを知って、慧はドスツと脇腹に拳を叩き込んだ。

「俺の事はなんて ガハツ！」

脩一は、慧の拳の前に、呆気なく膝を付いた。慧は、にっこりと笑いかける。

「そーゆー事は、黎貴に直接訊いてくれる？」

かなりイライラさせてしまっていたらしい。

その事にようやく気付いた脩一は、腹を押さえたまま大人しく呟いた。

「……………分かりました」

「よろしい」

慧は、大きく肯く。

「……………でも、黎貴、俺に懐いてくれるかな……………」

余程、昨日黎貴に「嫌だ」と言われたのが堪えたのだろう。ふと、

脩一は、いつもの脩一らしくない弱音を吐いた。

だから、慧はその弱音を笑い飛ばしてみせる。

「何言ってるの。あんたらしくもない。：脩一、あんたはウザイけど、あんたを嫌う人間なんてそうはいないわよ」

「慧……」

従妹として生まれた時から付き合ってきた慧だからこそ言える言葉だった。

脩一は、思わず感動してしまった。

口は悪くて、すぐに手が出る慧だが、本当は誰よりも優しいのだ。もう、ちよっと！ 離れなさいよね！」

歓喜のあまり抱きついてくる脩一にもう一発拳を叩き込んでから、慧は玄関のドアを開けた。

「ただいま」

「……おかえ」

律儀にも出迎えてくれた黎貴は、玄関に脩一がいるのを見て固まった。

「よ、黎貴……」

脩一は、慧に殴られた一発が効いているのか、玄関に蹲りながら片手を挙げて引き攣った笑顔を見せる。

慧はにっこりと微笑んだ。慧の微笑みには、黎貴は何か良いことがあると刷り込まれているようで、ふうつと表情を和らげる。

「今日は脩一も連れてきたわ」

「……え」

黎貴は、小さく声を上げる。また固まった。しばらく固まった後に、そろりそろりと後退りし始める。

それを見た慧は、黎貴の腕をサツと引っ掴んだ。

「どうして逃げるの？ 脩一は、あんたの神仙よ？ 味方なのに、何を怖がってるのよ？」

慧にはもうかなり懐いている黎貴は、慧の言葉に足を止めてふうつと脩一を見つめた。

「……脩一、は……味方……？」

脩一は、ここぞとばかりに身を乗り出す。

「そうそう。俺は、お前の味方だよ。…慧よりは怖くないから、もう少し仲良くしてくれると嬉しいんだけどな」

「何か言ったかなあ？」

脩一の言葉を聞きとがめて、慧は低い声で呟く。脩一は、ギクリと背を波立たせた。

「あ、け…慧ちゃん…」

「だあれが怖いですって？ 一体、だ・れ・が？」

「い、いや、それは…。ちよ、ふいた…！ ほふいるから！」

頬をびろーんと左右に引っ張られて、脩一は涙目で「痛い、伸びる」と繰り返す。

慧は、えいえいと更に引っ張ってから、ようやく解放してやった。

脩一は、頬をさする。すっかり赤くなってしまうていた。

「痛…。ホント、手加減なしだよなあ」

「何を今更。あんた相手に手加減したって意味ないでしょ」

慧は、ふん、と鼻を鳴らす。

まだ痛い頬をさすっていた脩一に、黎貴が可哀想に思ったのか、おずおずと近寄ってきた。

「…だ、大丈夫か…？」

「や。大丈夫大丈夫。いつもの事だし」

近寄って、自分から声を掛けてきてくれた黎貴に一瞬目を見開いたものの、脩一はすぐに何でもないかのように笑って答える。

「俺はちゃんと分かっているから。これも一種の『愛』だって」

「ちよつと、気持ち悪い事言わないでくれる？ マゾ？」

「ちっがーう！」

キラキラとした瞳でいった脩一に、慧は本気で鳥肌が立ったように半眼で睨む。

脩一も気付いたのだ。これまでの遣り取りが慧の半ば仕組んだ事だったと言う事に。

同情であれ、何であれ、まずは話しかけても安心な相手だと思わせる事が肝心。

そのために、慧は自ら憎まれ役を買って出たのだ。

案の定、黎貴は二人のやりとりから脩一に少しだけ親しみを持ってくれたようだった。

そうすれば、もうこっちのものだ。

結局黎貴を質問責めにして引かせてしまったが、脩一は何とか黎貴の心を掴む事に成功したようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0286x/>

龍は微睡む～蓬莱戯談(ホウライギダン)

2011年9月25日03時31分発行